

James Joyce Society of Japan, April 2023

# NEWSLETTER



## Topics

1. 第35回研究大会のご案内
2. 第35回研究大会プログラム
3. 研究発表要旨
4. シンポジウム要旨
5. 会場校よりお知らせ
6. 会費のお振込みについて

## 事務局連絡先

〒662-8501

日本ジェイムズ・ジョイス協会事務局

兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155

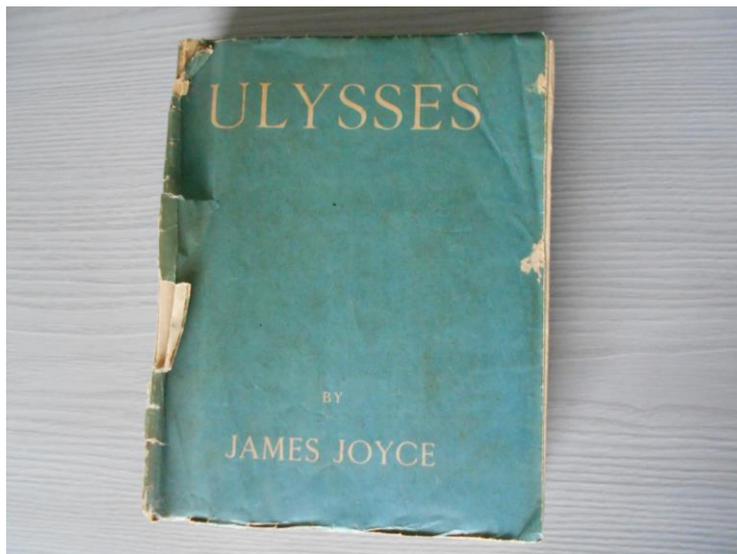
関西学院大学文学部

横内一雄研究室内

連絡先: [joyceanjapan@gmail.com](mailto:joyceanjapan@gmail.com)

協会ホームページ:

<https://www.joyce-society-japan.com>



シェイクスピア書店刊『ユリシーズ』（1925年、第7刷、横内所蔵）

## 1. 第35回研究大会のご案内

2023 年度の年次大会を来たる 6 月 10 日（土）に関西学院大学において開催します。2020 年度（第 32 回）と 2021 年度（第 33 回）は新型コロナウイルス感染症の影響によりオンライン開催を余儀なくされましたが、昨年度（第 34 回）はなんとか対面開催にこぎつけ、大成功を収めました。やはり学会の基本は、同じ対象について研究を営む者同士の人的交流を図ることにあります。まだまだ感染対策を注意しながらにはなりますが、年に一度、じかに顔を合わせ言葉を交わすことで大きな刺激を得る機会を大切にしたいと思います。おかげさまで今年度の大会も盛りだくさんの内容です。ぜひふるってご参加ください。

## 2. 第35回研究大会プログラム

日時：2023 年 6 月 10 日（土曜日）

場所：関西学院大学上ヶ原キャンパス F 号館

- |             |  |          |
|-------------|--|----------|
| 9:30-       | 受付   |          |
| 10:00-10:10 | 開会の辞<br>会長挨拶   | 会長 吉川 信  |
| 10:10-10:40 | 研究発表 1<br>発表者：上條裕佳<br>発表題目：Gnomon, <i>it contained nothing</i>   | 司会：田多良俊樹 |
| 10:45-11:15 | 研究発表 2<br>発表者：新井智也<br>発表題目：ことばの教科書、教科書のことば<br>——James Cornwell の教育手法と <i>A Portrait of the Artist as a Young Man</i> の詩的言語 | 司会：田多良俊樹 |
| 11:20-11:50 | 研究発表 3<br>発表者：岩下いずみ<br>発表題目：“Photo girl” ミラーに見る記憶と共同体  | 司会：南谷奉良  |
| 11:55-12:25 | 研究発表 4<br>発表者：福山孝子<br>発表題目：「ドン・ジョヴァンニ」イン『ユリシーズ』——忘却と共感の旅への誘い   | 司会：横内一雄  |
| 12:25-13:15 | 昼休み  |          |
| 13:15-13:30 | 総会   |          |
| 13:30-15:40 | シンポジウム 1：第 12 挿話再考——複眼で読む Cyclops<br>小田井勝彦（兼司会）、木ノ内敏久、豊田淳、坂井竜太郎  |          |
| 15:50-18:00 | シンポジウム 2：ジョイスと女性<br>田中恵理（兼司会）、高橋渡、山田幸代、安井誠   |          |
| 18:00-      | 閉会の辞   |          |

## 3. 研究発表要旨

*Gnomon, it contained nothing*

上條 裕佳

『ダブリナーズ』の「姉妹たち」の冒頭で、主人公の少年が親交のあった神父の死が近いことを知って、ユークリッド幾何学で使われている“gnomon”という言葉の思い浮かべる。短編の最後では、神父の姉妹が弔問に訪れた少年とその叔母に向かって“it contained nothing”と言うが、it は壊れた聖杯を指す。更にこの聖杯が、神父の壊れていった切っ掛けになったことが明かされる。短編の内容から gnomon の意味を読み取ることはできないが、多くの先行研究で色々な解釈がなされてきた。

岩田至康は『幾何学大辞典』の中で gnomon について解説している<sup>(1)</sup>。彼の解説でも gnomon の定義は「平行四辺形の一角からそれに相似な平行四辺形を取り去った残りの部分」の意味であり、ジョイス研究のそれと同じである。しかし、彼は gnomon は現在ではあまり使われていないと指摘している。更に、ギリシャでは代数学が発達していなかったために、代数学に属するようなこともすべて幾何学的に考えたと述べている。『ダブリナーズ』が発表された 20 世紀前半には gnomon は代数学に取って代わられてその価値を失ったことになる。言い換えると gnomon の中身は空っぽということで、壊れた聖杯にはキリスト教の核心となるものが空であったことに対応する。『ダブリナーズ』の短編「恩寵」のタイトルの意味は、その内容から「人間に神から与えられる無償の賜物」と思われるが、深く読むとそれが描かれていないことを読み取れる。その言葉の本来の意味が空という点で、“grace”は gnomon と平行関係にあるといえる。更に、『ユリシーズ』では瓶詰め肉が重要なモチーフとして登場するが、第 17 挿話で帰宅したブルームが目にするのは、空の瓶である。本発表では、gnomon から「空」という意味を引出し、その意味を通してジョイス作品の解釈を述べる。空はジョイス研究にしばしば登場する「不在」と相似かもしれないが、不在が大きな意味をもつのに対し、空には意味がない。

(1) 岩田至康『幾何学大辞典 第 1 巻』槇書店、1983、486-488p.

-----『幾何学大辞典 第 2 巻』槇書店、1984、423-424p.

## ことばの教科書、教科書のことば

——James Cornwell の教育手法と *A Portrait of the Artist as a Young Man* の詩的言語

新井 智也

*A Portrait of the Artist as a Young Man* の第 1 章で、Stephen Dedalus は、“Doctor Cornwell’s Spelling Book” (P 1.113) に載っている例文を思い浮かべる。この本が、James Cornwell の *Spelling for Beginners: A Method of Teaching Spelling and Reading at the Same Time* であるということは、既に先行研究によって指摘されている。

本発表で問題にしたいのは、この教科書の例文に対する幼い Stephen の立場である。彼は“*They were like poetry but they were only sentences to learn the spelling from*”と考える(P 1.113-15; emphasis added)。この接続詞 but は、「詩のよう」であることと、綴りを学習するための例文であることは本来両立しないという前提を彼が持っていることを示唆する。しかし、Cornwell は自身の教科書においてむしろ意図的にこの二つを両立させている。*Spelling for Beginners* は、同じ発音かつ同じ綴りの部位を持つ単語を集めて例文に盛り込み、子供に読ませることで、単語の

綴りと読むことを、その副題が示す通り「同時に」学習させることを目指した教科書である。同じ発音の部位を含む言葉が繰り返されるようにすることで各例文を読み上げやすいものとし、そのことによって生徒の学習を促進する仕組みがこの教科書には内在しているのであり、例文が Stephen が詩的と感じるものになっているのはそのような工夫によるものと考えられる。例文を読むことに心地良さを感じ暗唱するまでに至っている Stephen は、知らずしてその狙い通りにこの教科書を受容し、自らの言語能力を発達させるのに役立てていることになるのである。

本発表では、Cornwell の他の教科書にも言及しながら、彼の教育手法と思想を確認する。そのうえで、Stephen が Cornwell の意図を十分理解せずに、しかし彼の狙い通りのあり方で学習を積んでいる様がこの小説で描かれているということの意味を論じていく。そうした考察を通じて、主人公 Stephen の言語能力・認知能力の成長と、小説自体の文体について、改めて分析していきたい。

引用文献：James Joyce. *A Portrait of the Artist as a Young Man: Authoritative Text, Backgrounds and Contexts, Criticism*. Edited by John Paul Riquelme, W. W. Norton, 2007.

## “Photo girl” ミリーに見る記憶と共同体

岩下 いずみ

本発表では、『ユリシーズ』（1922）刊行百年を超えた 2023 年において、ブルームとモリーに比べると議論の盲点であったともされる二人の唯一の生存する子供ミリーに注目し、彼女の職業である写真と記憶の関連から、共同体のあり方について論考したい。ミリーについての先行研究を論考の一助としつつ、ユダヤ系移民家系であるブルーム、またその子孫であるミリーが、記憶を残す媒体でもある写真という生業に紐づけられる意義を、共同体の概念から解き明かすことを目的とする。

ミリーは、ダブリンに住む両親から離れてマリンガーの写真屋で働き生計を立てている。第 18 挿話でのモリーの思考によると、「モリーがボイランと浮気しやすくする」ことに加えて、「ブルームの家系を継ぐ写真業に就かせる」ことことを目論み、ブルームがミリーに写真を習わせるためマリンガーにやった、ということになっている。この起点について再考し、写真という生業がブルームの家系に対して代々持つ含意、そして作品の舞台当時のアイルランド女性写真家、女子教育という背景、『ユリシーズ』執筆後の 1935 年、ジョイスが娘ルチアにカメラを与えた興味深いエピソード (*Letters III 374*) も考え合わせたい。

また、ミリーは写真館で働いているが、交際しているバノンが彼女の写真を持っており、ミリーについて“Photo girl” (*U1. 685*) と言及していることから、カメラマン（見る側）としてだけではなくモデル（見られる側）としても写真に携わる仕事をしている可能性がある。このことは“Photo girl”と紐づけられる「コダックガール」表象によっても裏付けられている。コダックガールはカメラを携えた扇情的とも言えるイメージで知られ、写真を撮る（見る）のと同時に、その姿を見られる表象だった。コダックガールは、カメラマンが従来持つ「見る」イメージが、広告業界の恣意的な女性イメージの氾濫、女性写真家の出現によって複雑化したことを商業イメージが伝えている一例だろう。“Photo girl”ミリーは、ブルームの祖父から写真業を受け継ぐと同時に、時代に合わせて更新された存在であることがその代名詞からもうかがわれる。この代名詞には、彼女が家系という共同体を受け継ぐにおいて、時代の影響を受けつつ力強くそれらに順応していく一端が示されていると言えるのではないだろうか。

以上の点を軸に、ブルームの家系の生業とも言える写真を記憶の継承に介在する媒体として考察しながら、作品に描かれる当時の共同体のあり方とともに、後の時代にも通じ合う共同体の未来像について論じる。

## 「ドン・ジョヴァンニ」イン『ユリシーズ』

### ——忘却と共感の旅への誘い

福山 孝子

「あちらに行って、手に手をとって」「さあ、行きましょう」。『ユリシーズ』全編にたびたび現れる「ドン・ジョヴァンニ」の aria ‘Lá ci darem la mano’は、情事への誘惑の歌であるが、同時に、危険な旅への誘いの歌でもある。冒険の旅は、『オデュッセイア』の重要なテーマである。ボイランと冒険の旅に出発しかけたモリーであるが、夜間に帰宅したブルームに、朝食に卵が食べたいと言われたことがきっかけとなり、長い思索の旅へと変更を余儀なくされる。眠りにつく前の長い思索の中で、モリーはこれまでに心を交わした男たち女たちに思いを巡らし、ボイランとブルームを鳥瞰する。彼女の脳裏に様々な歌が浮かぶが、そのうちのひとつが、この aria である。

‘Lá ci darem la mano’には共鳴が示唆されている。第 6 挿話でブルームは、モリーの歌声を賞賛するが、その時彼が思い描いたのも、この aria の一節である。“Mi trema un poco il”と歌う彼女の“tre”の響きの美しさ、ツグミ (throstle) という言葉は、彼女のあの声を表すためにあるのだ、とブルームは思う。“trema”は震えるという意味で、“tr”は音楽用語ではトリル、つまり音を震わせる装飾符としても使われる。精神科医である木村敏は、音楽の演奏など、現実から少し遠ざかった状態において知覚や記憶が相互に影響しあう場を「あいだ」と呼んだ。「あいだ」では、互いの知覚の共鳴がおこり、演奏者は、共演者の演奏をあたかも自分で奏でているように感じる。哲学者の伊藤亜紗も、意識から少し離れた場での共鳴と共感を論じている。

この発表では、『ユリシーズ』に現れる「ドン・ジョヴァンニ」のいくつかの場面を精読し、忘却の中で起こる共感の旅を論じる。

---

### 3. シンポジウム要旨

---

#### シンポジウム 1

#### 第 12 挿話再考

#### ——複眼で読む Cyclops

小田井勝彦 (兼司会)、木ノ内敏久、豊田淳、坂井竜太郎

記念すべき日本ジェイムズ・ジョイス協会第 1 回大会のシンポジウムは、第 12 挿話についてであった。昨年には『ユリシーズ』出版 100 周年というジョイス研究のひとつの節目を通過し、ジョイス研究はこれから新たな局面を迎えることとなるだろう。そのような節目で原点に立ち返るべく、第 12 挿話のシンポジウムを企画した。折しも東京の『ユリシーズ』精読の会では 2016 年 12 月よりこの挿話を 9 割ほど読み進めており、そのメンバーに

よりこれまでの読書会の成果を披露することとしたい。

第 12 挿話は極めて難解である。これまでの挿話で必ずあったはずの主人公ブルームの内的独白の不在、柳瀬氏による「犬」説もあるほどいまいち正体不明の「アイ」の語り手、登場人物たちが入退場を繰り返し酒が入って全くかみ合わない会話、そして様々な文体を駆使してあるものの意図のはっきりしないパロディ。これまで長い年月に渡り様々に議論されてきたものの結論の出ていないものばかりであると言えよう。そこで、このシンポジウムではそれら様々な論点を各講師が検証することで、第 12 挿話の全体像を模索していくこととしたい。

まず司会の小田井が、先行研究をふまえ挿話全体の論点の整理をする。次に木ノ内がこの挿話の語り手である「アイ」の素性そして役割について、坂井が酒場に集う人々とのについて論じる。これら三人の発表により、パロディ、会話、「アイ」による語りという挿話の基本構成が整理されることとなるだろう。最後に、豊田がブルームの語る「愛」とは何かについて The Beatles の love と比較考察することで、この挿話でジョイスがこめた普遍のメッセージを探っていきたい。とはいえ結論がひとつに定まる挿話ではない。フロアからの活発な議論をお願いしたい。(文責・小田井勝彦)

### 「俺 (I) は何者か」

木ノ内 敏久

『ユリシーズ』第 12 挿話の中で「アイ」は珍しく語り手が自らの存在を顕示する語り手である。ところが、同挿話では 33 のパロディ (断章) が挿入され、アイは語りの場を支配できない。むしろ、パロディによってアイとは違ったディスコースを展開するもう一人の語り手の方がテキストを支配している感すらある。このことから次の問いが浮かび上がる。アイはいったい何者なのか、アイはどんな役割を果たしている (もしくは、果たしていない) のかという問いである。

①執筆事情、②テキスト内での位置付け、③アイの語り口——の 3 点からアイの実相に迫る。まず、執筆事情だが、先行研究が明らかにしたように、第 12 挿話では、酒場での情景描写や登場人物の会話以前に、パロディが最初に存在した。ジョイスはパロディから書き始め、次に酒場の情景を描き、最後に一人称の語り「アイ」を登場させたという。ここから言えることは、アイという存在が最初から語りの主体として二次的な役割しか与えられていないということである。

一方、アイの素性をプロファイリングすると、アイは借金取りを生業としている。借金取りは当時の社会でもっとも卑しい職業であった。経済の底辺にいる存在としてアイはユダヤ人と噂されるブルームに敵対的な言辭をしばしば吐き、時には偏狭的ナショナリストの「市民 (シティズン)」の言葉を増幅させる。語り手としてユダヤ人に対する偏見や社会・イデオロギー的な特殊な世界観を描写する役割を担っている。

以上の基本情報をもとにアイが何者であるかを考えると、アイは語り手としてテキスト内に存在はするが、酒場に本当に実在する人物なのかという疑問が浮かんでくる。かつて柳瀬尚紀氏はアイを犬であると解釈したが、「犬」説も含めて実在するとみなす考え方と、不在説のそれぞれに相応の説得力がありそうである。③のアイの語り口を手がかりにこれらの疑問を検証していく。

パロディは酔っ払いを救う！？

坂井 竜太郎

ジョイス作品において、登場人物たちが酒場で酔っ払いながら会話するという場面は、『ダブリナーズ』から『肖像』、『ユリシーズ』に至るまで繰り返し登場する。「小さな雲」においては、それが友人への幻滅と自己の境遇への絶望へとつながり、『肖像』のクリスマスの晩餐では、政治と宗教の反目が醜い口論へと発展し、団欒をぶち壊しにする。

そういう意味で、それまでのジョイス作品では、酔っぱらいの会話が、悲劇的な結末や何らかのカタストロフを招くことが多かったのであるが、本シンポジウムが対象とする『ユリシーズ』第 12 挿話においては、終局のカタストロフが悲劇的な結末と言い切れるかどうか、疑問が呈されるべきであるように思われる。酒の酔いが回っていくにつれて、ナショナリズムやユダヤ人憎悪が高まり、シティズンは去り行くブルームに対して罵詈雑言を浴びせて空き缶を投げつけるのであるが、このラストシーンもパロディに挟まれて、悲劇的な印象が薄められていると言えるだろう。

本発表においては、キアナンの酒場に集う人々の会話とその間に挿入されている種々のパロディに着目し、シティズンをはじめとする登場人物たちの言説を分析しつつ、それらの言説とパロディの関係を考察する。ナショナリズムやユダヤ人問題などの政治的なものがテーマであると思われる本挿話で、パロディの果たす役割を明らかにすることができれば、自ずとなぜパロティが導入されなければならなかったのかという理由も理解できるだろう。

知を握るファロスの主体が語るという言説が飛び交う中で、繰り返し現れるパロディは、そのような神経症な在り方からの解放であると同時に、イデオロギーや宗教といった「知」そのものをも大らかに肯定して救っているように思われる。ナショナリズムや人種問題や宗教などの政治やイデオロギーが語られているという本挿話の「内容」とパロティが繰り返し導入されるという「形式」の繋がりを本発表で明らかにしたい。

## Bloom の Love, Beatles の Love

豊田 淳

Project 22 Ulysses の第 12 挿話の回のレクチャーで、鈴木英之氏が指摘したように、ブルームの love (U.12 1485) という言葉は単眼巨人ポリュペモスに擬せられるシティズンに投げられた火の点いたこん棒であったと考えられる。では、このブルームの語る love とはどのようなものであろうか？ブルームの発言、意識、行動から探してみたい。

一般に love というとき、私たちは男女の恋愛を思い浮かべるが、その言葉には自己愛、家族愛、祖国愛、神への愛も、もちろんジョイス愛、ビートルズ愛なども含まれる。ブルームの love の中身は一体どういうものであろうか？ブルームは自分の欲望を抑えて、自己犠牲的に他者に尽くす人間では決してない。エッチな妄想をし、見知らぬ女性と秘密の文通をし、少女を見ながらマスターベーションをする。しかしながら、妻モリー、娘ミリー、自死した父親ルドルフ、早世した息子ルディへの家族愛は複雑な気持ちを抱えつつも十分に伝わってくる。モリーの不倫に関しても、force を用いず、hatred も抱かず対応しようとしている。さらに、道を渡る目の見えない青年を助け、亡くなった友人ディグナムの遺児のために走り回る。飼い猫にも優しい。このような複雑な主人公を造形し、love と言わせたジョイスの考え、頭の中はどうなっているのか、考察していきたい。

一方、The Beatles は 1962 年にデビューし、1970 年に解散するまでに数多くの曲を発表した。曲の根底には一貫したテーマとして love がある、とメンバーの一人、Paul McCartney はインタビューの中で語っている。The Beatles

のオリジナル曲の中から、アイドルだった初期のシンプルなラブソングから、作詞の面でも深まりを見せ、実験的な作品を発表した中期、再びシンプルなサウンドに回帰しつつも円熟を見せた後期まで、そこから数曲を取り上げ、その歌詞の中に見られる love という言葉の変遷を辿っていく。

ジョイスとビートルズのメンバーの間には約 60 年の年齢差があるが、ジョイスが作り上げた小説の主人公ブルームの love と The Beatles が最終的にたどり着いた love は意外に近いものがあるのではないかと。

## シンポジウム 2

### ジョイスと女性

田中恵理（兼司会）、高橋渡、山田幸代、安井誠

ジョイスの女性描写に対する批評的関心は時代とともに変容してきた。特に、*Women in Joyce* (1982) 出版以降、それまで象徴的あるいは写實的にのみ捉えられていたジョイスの女性表象は、フェミニズムのみならずポストコロニアリズム、ポストモダニズム、カルチュラル・スタディーズなどの観点から多角的に論じられるようになった。21 世紀に入ってから女性登場人物に対する社会・文化的背景を反映した読みが次々となされ、*Ulysses* 出版 100 周年を経た現在は、第四派フェミニズムを意識した作中の女性の声を拾う試みもなされている。ジョイスの生きた 19 世紀末から 20 世紀前半は、第一派フェミニズムがヨーロッパに広がり、女性の立場が変わりつつあった時代である。ジョイス自身は、*Sylvia Beach* や *Hanna Sheehy-Skeffington* といった進歩的な女性たちと接する一方で、アイルランドの中でサバルタンとして生きる自分の母親のような女性たちも目にしていた。そうした体験の中でジョイスは、女性たちをどのように表象したのだろうか。おそらく、ジョイスの作品においては、すべての女性登場人物が一元的な解釈に留まることはなく、また、一人の女性描写についても多様な読みが求められる。そこで、本シンポジウムでは、各パネリストがそれぞれのアプローチでジョイスの女性表象を再考する。まず、高橋渡がジョイスの伝記的背景から女性描写を精査する。次に山田幸代と安井誠が理論的背景を踏まえた女性キャラクターの新たな読みを提供し、最後に田中恵理がこれまであまり取り上げられなかった女性表象の分析を試みる。ぜひフロアも交えて活発な議論を行いたい。

## May と Nora の影を追って

高橋 渡

*Ulysses* 第 9 挿話で Stephen は「シェイクスピア論」を展開するが、それはメタフィクションであり、ジョイスの作品自体への自己言及となっている。彼の「シェイクスピア論」はシェイクスピアの自伝的解釈であり、シェイクスピアの作品には彼の実人生が色濃く反映していると主張するが、ジョイスの作品にも *A Portrait of the Artist as a Young Man* を初めとして、ジョイス自身の人生が塗りこめられている。しかし、Stephen の「シェイクスピア論」が都合のよい部分のみを繋ぎ合わせた極めて恣意的な解釈であるのと同様、ジョイスの人生の断片は、作家の意図に沿って組み替えられ再編されている。

ジョイスの描く女性たちにも同じことが言える。ジョイスの作品には、彼の最も近い女性である母親の May (Mary) と妻 Nora の影を見て取ることが出来る。Nora の場合、例えば、'The Dead' に登場する Gretta Conroy や

*Ulysses* に登場する Molly Bloom の姿にその影を窺うことが出来る。また、May の場合、直接的には *A Portrait of the Artist as a Young Man* に登場する Stephen の母親 May にその影を明確に見ることが出来るが、それに留まらず、母親の生き様は、ジョイスに、アイルランド社会が抱える問題やその中で生きる女性の置かれた状況をまざまざと認識させる大きな要因になったと言えるだろう。

本発表では、この二人の女性が如何にジョイスの作品に影を落とし、また小説の中でどのような形・意味で用いられているのかを追って行きたい。

## マリリン・モンローとマドンナからレディ・ガガへ？

### ——Gerty と Molly にみる Masquerade と Mimicry

山田 幸代

ジョイス作品に登場する女性の表象分析は、ジェンダーおよびフェミニズム思想によって「女性性」が生来の性質ではなく、社会的構築物として認識されるようになった頃に大きな変化を迎えた。1929 年に心理学者 Joan Riviere が提唱し、のちに Jacques Lacan が使ったことで一般化した‘Masquerade’の理論は、家父長制社会では女性がつねに女性性を装うことが求められてきたという文化的背景を可視化した。この理論を発展させたのが‘Mimicry’である。Mimicry とは社会で求められるステレオタイプな女性性を、批判的な距離をもって意図的に反復することで、そのイデオロギーに疑問を呈する行為である。

ジョイス研究においては *Molly Blooms* (1994) に収録の“Pretending in ‘Penelope’: Masquerade, Mimicry, and Molly Bloom”において Kimberly J. Devlin が、Molly の語りを Mimicry として分析している。その中で Devlin は、Masquerade と Mimicry の違いをマリリン・モンローとマドンナの違いに例えているが、*Ulysses* に当てはめるなら Gerty と Molly に相当するのではないだろうか。第 13 挿話と第 18 挿話には、女性がマスメディアによって流通したイメージに従って自己を形成する過程が描かれており、たとえば Gerty と Molly はともに女性向け雑誌で宣伝された女らしさを装おうとしている。しかし両者の間には、わずかだが決定的な態度の違いがある。本発表では Devlin の論を発展させ、ポストコロニアリズムにおける「植民地的擬態」としての Mimicry も踏まえた上で、二つの挿話における女性の語りを再読する。

## ジョイスの女性たちのインターセクショナルな生 ——彼女たちの経験は私たちに何を語っているのか

安井 誠

ジョイス作品に登場する女性たちは、「家父長制」「イギリス帝国支配」「カトリック」などからの抑圧に苦しんでおり、それらはしばしば「二重、三重の抑圧 (double or triple oppression)」というふうにも言われる。そのような中、1980 年代終わりから 1990 年代にかけて起こった第三波フェミニズムは、女性をひとまとまりにして考えるのではなく、性別以外の属性に基づく女性たちの間の差異や多様性により一層注意を払おうと呼びかけた。とりわけ注目に値するのが、アメリカの法学者 Kimberle Crenshaw が 1989 年に発表した論文 “Demarginalizing the Intersection of Race and Sex : A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics” で唱えた「インターセクショナルリティ」という概念である。もともとはブラック・フェミニズムから生まれてきた視点であるインターセクショナルリティは、女性たちの経験を複数の抑圧の合計という考え方ではなく、

人種、ジェンダー、セクシュアリティ、ネイション、アビリティ、年齢など数々のカテゴリーが相互に関係し、形成し合っているものとして捉える。そのような視点でジョイス作品に登場する女性たちを再考すると、例えば Stephen の母の経験は Molly の経験とは違ふし、Gerty の経験は ‘The Boarding House’ の Polly の経験とも違ふ。本発表では、様々な権力や複数の抑圧が相互依存的に交差しているインターセクショナルな事実に着目し、ジョイス作品に登場する女性たちの経験を再考して分析したい。

自転車に乗る女性たち  
——ジョイス作品にみる身体鍛錬と女性解放  
田中 恵理

*Ulysses* において自転車に乗る女性は数回言及される。彼女たちは、登場人物から“unfeminine”だと批判される一方で、“the new woman bloomers”の象徴として女性の解放とも結びつけられる。Gifford も Sam Slote も 1904 年において女性が自転車に乗ることはスキャンダラスであったとの注釈を付しているが、当時のアイルランドにおけるサイクリング事情を研究した Brian Griffin によると、1890 年代以降、女性が自転車に乗ること自体は比較的広く受け入れられていたという。問題は、彼女たちの masculine な服装やマナーであって、それが女性のセクシュアリティ違反や男性領域への侵入を示すものとみなされていた。自転車は、アイルランドでも 1860 年代以降普及し、主に若い運動好きの中流階級の男性たちに利用された。その後、女性の利用者も増えていったが、そんな彼女たちに対する戸惑いや敵意も多くあった。1880 年代に「安全型自転車」が普及すると、女性たちに向けられていた当初の非難は少なくなっていき、一方で女性にとって自転車は身体的かつ精神的な解放をもたらすものとなっていく。

ジョイス作品におけるスポーツや身体鍛錬と言えば、Eugene Sandow や GAA との関わりで言及されることが多い。しかしながら、19 世紀後半以降普及し始めた自転車という、人間の身体能力を動力とする新しい装置を、そして自転車をめぐるジェンダーバイアスをジョイスは描いている。*Ulysses* 以降登場する自転車に乗る女性は、*Finnegans Wake* ではより開放的に描写されているとの指摘もある (Julie McCormick Weng)。女性の立場が変化しつつあった世紀転換期、ジョイスは女性をどう描いたのか、自転車に乗る女性たちをそして彼女たちをめぐる社会の反応を通して、身体鍛錬や女性解放との関わりを踏まえながらみていく。

---

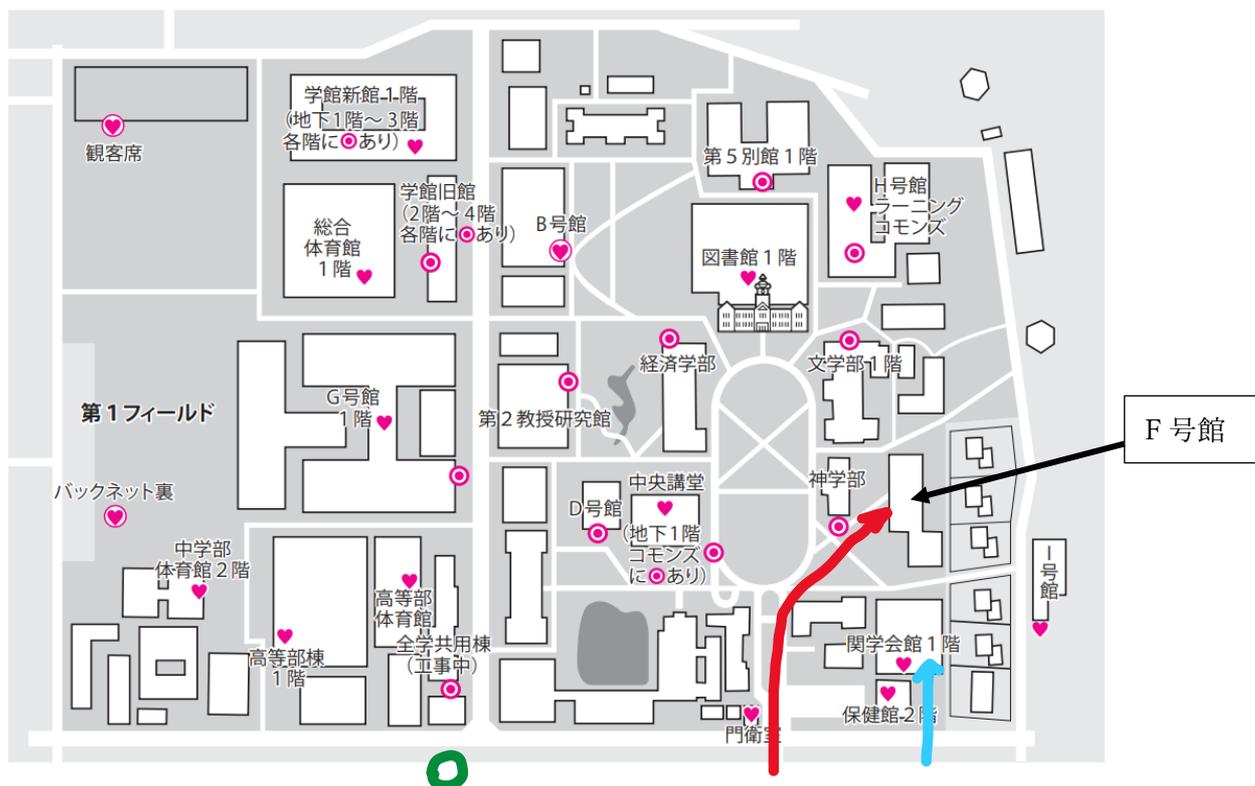
## 5. 会場校よりお知らせ

---

会場校となる関西学院大学上ヶ原キャンパスへのアクセスはこちら (<https://www.kwansei.ac.jp/access/uegahara>) をご覧ください。JR 西宮駅から、阪急バス (甲東園行き) で「関西学院前」下車 (約 18 分)。もしくは阪急甲東園駅から、徒歩 (約 12 分) もしくは阪急バス (関西学院前～XXX 行き) で「関西学院前」下車 (約 5 分)。

近隣に宿泊施設はありません。宝塚駅近辺か、大阪梅田近辺か、神戸三宮近辺のホテルをご利用ください。いずれの場所からも阪急電鉄で甲東園駅までアクセスできます。

キャンパス内の地図は以下の通り。赤い矢印に従って正門を入り、F 号館 (会場) にお越しください。



なお、近隣にわかりやすい食事処はあまりありません。青い矢印に従って関学会館内のレストラン「ポプラ」をお使いになるか、画面下の緑の丸印の位置にあるコンビニをご利用ください。

## 6. 会費のお振込みについて

会費は協会の口座へのお振込みをお願い致します（大会会場での支払いはできません。尚、既にお振込みを済ませていらっしゃる方で、領収書が必要な方は受付でその旨をお知らせ下さい。その場で発行致します。）。

振込用紙をご利用の場合は、郵便局や金融機関に備え付けの用紙をお使い下さい。恐れ入りますが、お振り込みの手数料は会員の皆様にご負担頂いております。ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合、振込先が異なりますのでご注意ください。

一般会員・・・5000 円 学生会員・・・3500 円

1. ゆうちょ銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会  
口座番号（記号）10430  
番号 1854541

2. ゆうちょ以外の銀行からのお振込みの場合

名義 日本ジェイムズ・ジョイス協会  
銀行名：ゆうちょ銀行  
金融機関コード：9900 店番号：048  
預金種目：普通  
店名：〇四八店（ゼロヨンハチ店）  
口座番号：0185454